

本企画は、UTCP 上廣共生哲学寄付研究部門 L2  
そして L3 プロジェクトの共同開催企画になります。  
障害当事者を中心として発展してきた「当事者研究」と  
カフェや学校などを中心に展開してきた「哲学対話」が  
ドラマという空想の場において邂逅する試みです。

自分自身の困難や問いと  
より安全に向き合える方法はないだろうか...。  
私たちは、フィクション(物語)の中で、  
登場人物の仮面を被って語ることで、  
それが可能になるのではと考えました。  
フィクションという安全空間の可能性について、  
参加者の皆様と探求してゆければ幸いです。

企画委員会／松山(福士)侑生、大谷賢治郎、水谷みつる、土井真波  
ポスター写真／荻野亮一

## UTCPとは

共生のための国際哲学研究センター(UTCP)は、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属する哲学の国際的な共同作業のための研究センターです。UTCPは、グローバル時代に対応する哲学・思想の国際的ネットワークを形成し、研究を推進します。また、その成果を広く国内外に公表するとともに、新たな人材の育成及び幅広い学際的・社会的・国際的連携活動の推進に資することを目的としています。

## UTCP 上廣共生哲学寄付研究部門

### L2 「共生のための障害の哲学」

本プロジェクトは、障害当事者との連携、海外の研究者および神経科学等の分野における自然科学系の研究者との共同研究などを通して、障害概念と当事者性の問い直しを行い、障害者と健常者との間の共生社会を築くための哲学を展開していくことを目的としている。また、障害の哲学を進めていくことによって得られた成果を哲学研究へとフィードバックしていくことも試みる。

### L3 「Philosophy for Everyone(哲学をすべての人へ)」

哲学カフェ、学校での哲学教育、子どものための哲学(P4C)、国際哲学オリンピック(IPO)など、哲学は「対話」や「教育」という形で、社会の中に広がっている。本プロジェクトでは、ワークショップや講演会を開催することで、国内外の哲学対話・哲学教育の専門家との交流を促進し、互いの情報や方法・課題を共有し、全国的・国際的なネットワークを構築・強化していく。

(参照／UTCP HP <http://utcp.c.u-tokyo.ac.jp>)

## 【申し込み方法】

次のウェブサイトより申し込み登録をお願いします。

[http://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/events/2014/10/p4e\\_philosophy\\_for\\_everyone\\_wo\\_2/](http://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/events/2014/10/p4e_philosophy_for_everyone_wo_2/)  
(インターネット検索ワード：utcp event)

- \* どちらかの部だけのご参加も大歓迎です。
- \* 12歳以下のお子様連れの方や、特別な配慮が必要な方は、申し込みフォームにてご連絡下さい。
- \* 当日は祝日につき、学内購買が閉まっております。お飲み物をご用意下さい。
- \* 第1部にご参加される方は、動きやすい服装にてご参加下さい。  
また、靴下もしくは体育館履きをご持参下さい。

## 当事者研究とは

「当事者研究」は、2001年に北海道浦河町にある「べてるの家」から始まった「エンパワメントアプローチ」です。統合失調症などを抱えた当事者が、経済活動や生活経験を通じて、自助と自治(自己治療・自己統治)の方法を研究し、蓄積していく一連のサイクルが「当事者研究」であるとされます。

「当事者研究」が生まれた背景の一つに、SST(社会生活技能訓練)の浦河への導入があります。SSTは日常的な社会生活を送るための技法を、ロールプレイなどを通して訓練していくものです。SSTは1990年代はじめにべてるの家でも導入されましたが、べてる流にアレンジされていく中で「当事者研究」が生まれてきました。

「当事者研究」は自らの問題に向き合い、仲間と共に「研究」していくことで、自己を再定義し、人とのつながりを回復することを促す機能を持つものともされます。現在では学校や企業などへも広まりつつあります。

(参照／向谷地生良「当事者研究とは—当事者研究の理念と構成—」[http://toukennet.jp/?page\\_id=56](http://toukennet.jp/?page_id=56);

石原孝二「当事者研究とは何か—その理念と展開—」石原編『当事者研究の研究』医学書院、2013年)

## 哲学対話とは

哲学とは「真理を探求すること」です。哲学は、ソクラテスの問答法から始まりましたが、それは対話によって真理を探求することでした。現在では様々な形式(ネオ・ソクラティックダイアローグ、哲学カフェ...etc.)で行われていますが、これらに共通するのは「真理を探求するために他者と共に問う」ということです。

その中でも、子どものための哲学 Philosophy for Children (略してP4C)という哲学対話の実践が目覚ましい広がりを見せています。P4Cは、1973年にアメリカの哲学者マシュー・リップマンが始めました。正解がない事柄について、他者と対話しながら探求しますが、その過程で探求の共同体が組織されます。その組織では知的安全性intellectual safetyが機能し、このsafetyの中において、批判力・創造力・ケアする力が育まれると言われています。このことから、P4Cは哲学実践であると同時に教育実践として、広く世界の学校で取り入れられ、現在ではUNESCOでも提唱されています。

(参照／河野哲也『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』河出書房新社、2014年)